占いごっこ

流ヶ崎　茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
占いごっこ

【Ｎコード】
Ｎ４８２９Ｓ

【作者名】
流ヶ崎　茜

【あらすじ】
占い師の流ヶ崎茜　今回のお客様は女子高生。

赤い眼鏡の子

私は、流ヶ崎茜。良く当たると評判の占い師だ。今日も、いつもの路地裏に座っていると、来た来た・・・。今日ｙは四人連れか。手強そうだ。

「あっあそこだよ、ほら、いるじゃん」

・・・あの手の女子学生は苦手だ。いいコトを言えば

「うっそ～～～。ほんと？？」

の返事が返ってくる。信じているのか、疑っているのか解らず、閉口するばかりだ。

少しでも気に入らないことを言ってしまうと、後ろの友人たちとヒソヒソ声で

「この人、変だよね。当たんないじゃん」と

ニヤニヤといじめにも似た言葉と一緒に、私に嫌な目線を送ってくる。世界は自分を中心に回っていると、信じて疑わない、全く扱いづらい人種だ。

でも、ここを動くわけにもいかず、本を読んでいるふりをしていた。

「一回、二千円だってぇぇ」と

まるで「今なら、半額の千円でいいよ。それとも二人で二千円でもオッケー」と

閉店場際のスーパーの叩き売りみたいに、（おまけしてよ）オーラを出してきたが、私は本を読むふりを続けた。すると・・・

「私、占ってもらおうかな」

髪を長く伸ばして、赤いフレームの眼鏡をかけた背の高い子が前に進み出てきた。

持っていたスポーツバッグを、私の商売道具の机の上にドサッと音がするほど乱暴に置いて

「ねーねー、アタシ今のカレシとうまくいくかなー」
「どうどう？」
「占いをされますか？」
「うん」
「では、手を出してください。両手です。」
「は～～い」
私は、彼女の両手を自分の両手で受け止め、まじまじと見つめながら
「・・・ん。・・・今の彼とはあまりうまくいっていないようだけど・・・」
赤いフレームの眼鏡をかけた背の高い子は、大きな声を出した。
「え～～！！まじ！！やばい！！ど～してわかるの？まじ！！やばい！！うっそ～」
後ろの友達三人と顔を見合わせる赤い眼鏡の子。
「ねーねー別れたほうがいいかな。どうどう？やばいよね？」
何がどうやばいのか、私にはこの子の言葉の意味が理解できなかったが
「相手の男の子は、別れたくないと思っているよ。もう少し様子を見てからでもいいんじゃないかな。大好きなサッカーの試合でも観に行くとか。
少し気分が盛り上がるようなデートをすると、仲が良くなるしまたうまくやれるよ。」
と優しくゆっくりした口調でアドバイスした。
「え～！まじ！どうしてサッカー部だって分かるの？？やばい！！うっそ！！」
もういい加減その”やばい”はヤメテ
耳に変なできものでもあるみたいに、嫌な感じに聞こえる。うんざりした顔をしそうになるのを堪えながら、お客様、お客様と心で念仏のように唱えた。
私は、その赤い眼鏡の子の手の平をじーっと穴のあくほど見つめてから、こう言った。

「あなたには、将来すごーく素敵でお金持ちな、やさしい旦那様が見つかるわ。その旦那様と結婚するのは二十八歳よ。今の彼かどうかは、わからないけど
とにかく、すごく強い男運があるわね。それを最大限活かす方法が、もっともっと自分を磨いていい女になることよ。そうすることで、更に男運もアップよ。」
「そっかー。へー。ありがとね、おばさん」
赤い眼鏡の子はそう言って二千円を出した。
「ありがとうございます」
私が、お礼を言ったのを聞いてもいない風で
「じゃ、また明日」
友達に別れを告げながら、机の上のカバンをひったくるように持って走り去っていった。後ろにいた友達三人は、あっけにとられた様子で
「せっかちだなー」
「行動力ありすぎー」
「まじ、うけるぅぅ」とか
言いながら、表通りへ向かって歩き出していった。
赤い眼鏡の子の走っていく後姿を見ながら、三〇年も前の自分が思い出されるのは、制服という象徴的な記憶のせいだろう。

占いのコツは、相手をよく観ること。観察することだ。あの赤い眼鏡の子は、サッカーボールのマスコットをバッグにも携帯にも付けていた。
本人がスポーツ大好きなんて感じは、みじんもなかったから、彼はサッカーが好き。随分簡単過ぎた。占いをするという人は、多かれ少なかれ、
何か不安であったり、悩んでいたりする。そうでなければ、占いなんてしない。自分が迷っているから、自分に近くない、知らない人の言葉を聞いてみたいのだ。

女子高生あたりは、わかりやすい。案外純粋ともいえる。見た目は大人びていても、まだまだ十代の小娘さ。この流ヶ崎茜の観察力と分析力で
占えば、ちょちょいのちょい、さ。

少し辺りが暗くなってきた。街灯に群がる蛾のように、サラリーマン達が夜の街に集まってくる。これからが、稼ぎ時だ。春だというのに、今年は
まだ寒い。ひざかけだけじゃ、心細いからカイロを椅子の上に乗せ、その上に座った。じんわり暖かい・・・。座りなおして前を向いた私に
「あの〜〜〜

えくぼのＯＬ（前書き）

今回も流ケ崎茜の分析力が光る。
今回のお客様は野暮ったいが、えくぼのかわいいＯＬだ。

えくぼのＯＬ

座りなおして、前を向き直った私にえくぼのかわいい３０台の女性が話かけてきた。
春の綿コートを着ているが、袖の部分がちょっと汚れている。きっと、去年か一昨年か、買ったまま
クリーニングには出してなさそうだ。今、流行のストールも巻いているが、色がぼやけていて野暮ったい感じに見える。身長は１６０センチくらい、スタイルは良いのだが髪がパサついていてちょっとはねている。きっと垢抜けない印象なのは、この髪のパサパサと洋服のせいだろう。顔もかわいい。スタイルもいいのに、もったいない。
「占いをお願いします」
丁寧な話し方だ。
「どうぞ、お座りください」
「で、どんなことを占っていきましょうか？」
私は、思いっきり営業用のスマイルで話した。
「実は、私はこれから先結婚できるのかどうか知りたいのです」
はにかんだ笑顔に、えくぼがかわいらしい。そして、話出した。
「父と二人暮らしなのですが、もう３７になります。４０歳になったら・・・とか考えます。もう
結婚はできないのかな、とか。父を残していくのも・・・後ろ髪をひかれます。想いを寄せる方が
いるわけでもないんです。仕事も中途半端で、何かこれができる、ってこともないし・・・後輩の子に
追い越されてるようなもので・・・」
顔が曇って、えくぼが消えた。何か、今日仕事で嫌なことでもあったのだろう。後輩の方が仕事が
仕事が早いとか、そんな事でも上司に言われたのかな。私は彼女の

話をずっと聞いていた。
「でも、将来結婚できそうなら少し安心できるな、と思いまして・・・」
そこで言葉は途切れた。10秒ほど待ってから
「では、手を出してください。両手です。」
えくぼさんは黙って手を見せた。その手はカサカサと荒れていた。髪と同じだ。いつも家事をしっかりとこなしているのだろう。髪や洋服にお金をかけていないのも、きっと貯蓄に励んでいるのではないか。37歳まで、15年勤めたとして、真面目に働いて、しっかり貯金すれば1500万はカタい。父親と住んでいるなら自宅だから、3000万らいは貯めているかもしれない。普通ならまだ父親も働いているくらいの年齢だ。その父親が口うるさくて、結婚できなかったのか、本人が理想が高いのか、ただご縁がないのか、まずはそこから見極めるとしようか。
「あなたのお父さんは、しっかりした信念のある方ですね」
ちょっと話を振ってみた。えくぼちゃんはふーっと小さなため息をつきながら
「がんこなんですよ・・・」と小さな声で言った。
「親は娘の事が心配なんです。当たり前ですょ。」
「わかってはいるんですけど、煩わしいと思うことが多くなってしまって・・・」
「とにかく、結婚できるかできないかということでしたら、結論から言えば、できます。」
えくぼちゃんの顔が、ぱっと明るくなった。
「できます。近々です。この先1週間くらいで出会った人と結婚するでしょう。」
「え〜〜っ。そんなすぐですか・・・」
「手相に出ています。ご縁がすぐそこまで来ています。相手の方に

失礼のないように
美容院にいって髪型を整え、新しい春のコートや、きれいな色のストールを買って運気を
更に上げましょう。コートは淡いベージュがラッキーカラーです。
アクセントのストールは、
きれいなベビーピンクとか、ライトグリーンがいいです。春らしいですね。その運気に
引き寄せられて、あなたの旦那様になる方が現れます。」
「化粧品は決まったブランドがありますか？」
私は、もっとこのえくぼちゃんを綺麗にしてあげたいと思った。
「いつもスーパーで適当に買っています・・・」
「でしたら、デパートに行ってきちんとしたアドバイスを受けてから選んでください。別に
高いものを買う必要はありません。ただ自分に似合うお化粧の仕方を教えてもらうんです。
デパートの人たちは、プロですから似合う色を見つけてくれます。
コートもラッキーカラーの
ベージュだけ守って、あとは好きなデザインや似合いそうなデザインをデパートで色々相談なさって
みてはどうですか？」
「何かデパートなんて、敷居が高くて行くことなかったですけど・・・そうですか・・・ちょっと
行くだけ行ってみます。
「まずは、自分を最高に見せることとです。相手にわかってもらうことです。キラキラした人を
男性は放っておきませんから。」
「お父さんの事は、後から考えても大丈夫です。相手の方は、わかってくれますよ。そういう方が
近々現れますから。ね。」
かわいいえくぼが現れた。

「それにしても、お父さん。随分悩まれていますよ。やはり娘が心配なんです。きっと表には出さないかもしれないけど、いつもお母さんに相談していますよ。」
「・・・確かにいつもお母さんのお仏壇に向かって、何かむしゃむしゃ話しています・・・」
「お母さんはいつごろ亡くなったんですか？」
「もう１０年になります」
「そうですか。この１０年、結婚適齢期といわれる時期をお父さんのお世話で過ごしてしまったと、お父さん自身は申し訳なく思っていますよ。」
「私の中でも、お父さんを悪者にして自分が結婚できない原因だと思っている所もあったかもしれません・・・いつも家事に追われて、仕事して、疲れて帰って、休みの日も家事ばかりで・・・何でこんな事ばっかり・・・って思ってやっていたから。」
「あなたはすごく頑張り屋さんなんです。この手相が、その証拠です。頑張り屋さんは、必ず報われます。必ずです。そして、もうすぐです。もうすぐ現れますよ。」
えくぼちゃんは、ちょっと涙目になって
「ありがとうございます。私・・・何やっても認めてもらえなくて・・・何でも中途半端で・・・」
言葉を遮って、私はちょっと大きな声で言った。
「そんなことありませんよ！」
「ずっと頑張ってきたじゃないですか。手相に出ています。長い間、自分の時間を家事に費やして
お金も家の為に使って・・・自分には殆ど掛けていませんよね。これからは、自分にもっとご褒美を
差し上げてください。自分の人生です。お父さんの人生じゃありません。」
えくぼちゃんが、私を見る目が変わってきた。

「はい。」
「仕事も、中途半端なんかじゃありませんよ。まず、とにかく自分に自信を持ってください。
あなたは十分魅力的です。新しいコートや化粧品を手に入れたら、後輩の子の前でお化粧してみてくださぃ。あ、ディオールの新色ですね。とか、ランコムの限定品ですね。とか、若い子は良く知っていますから、話も弾みます。アドバイスしたり、されたりするのは仕事の話だけじゃないですよね。そういった事もコミュニケーションです。そうやって世の中うまくつきあっていけるんですよ。」
何か吹っ切れた様子でふーーっと大きく息をしたえくぼちゃんは
「わかりました。今からデパート間に合いますかね？」
「まだ大丈夫ですよ。近くにたくさんありますもんね。」
「今まで足を踏み入れた事のないとこで、緊張します。
かわいいえくぼが更にくぼんだ。
「あちらも、仕事ですから丁寧に教えてくれますよ。まずは、行ってみてください。」
私も負けじと、思いっきり笑った。

俺様　（前書き）

今回のお客様は４０代のスーツをビシッと決めた男性。
俺様風を吹かせ、周りの空気を白けさせるが、取り巻きたちはご機嫌取りに必死だ。茜はちょっと意地悪してみた・・・

俺様

さて、今日はもう帰ろうかな。そんな事を思った矢先、大きな声が聞こえてきた。
「おーー、ここだ。ここだ。今後の俺の人生を占ってもらおうかな。センセイさま」
どかっと、４０代の高そうなスーツを着た男が前に座った。
腕組みした手には、ロレックスの時計がピカピカ光っている。
眉毛が濃くて、意志の強そうな顔立ちだが、腕組みするのは気が小さい証拠。
大きな声も、わざと一緒にいるおっさんたちを威圧している感じだ。
おっさん達は、思いっきりごますりをした。
「いやーー、林さんならバラ色の未来でしょう～ね～」
すり鉢でゴマをす姿が目に映るような声色だ。こんな言葉でも裸の王様になってしまった俺様には、気持ちよく聞こえるようだ。
「まーなー。もうこれ以上ってどんな未来かなー。」
「まだまだ、もっと会社が大きくなるんじゃないですか。世界でも通用するような・・・」
急に男のご機嫌が悪くなったようで、眉間にしわを寄せ
「今も世界で通用してるじゃないか！」
と、大声を出したから、おっさんたちは小さくなって黙ってしまった。

「占いをなさいますか？」
私は営業用のスマイルで話しかけた。
「おー」
「では、両手を出してください」
持っていたセカンドバッグを、おっさん持たせて
男は、がっしりした手を出した。がっしりはしているが、男性にし

ては小さい手だ。
私は、まじまじと手のひらを見てこう言った。

「最近変わったことがありましたね」
男の顔がぎょっとした。目が大きく見開かれ、手に力が入ったのが分かる。
「今後の人生についてというと、仕事もプライベートも占いましょうか」
「プライベートなんかどうでもいいんだよ。仕事だよ。仕事。どうなんだ。」
この男は、
イラつく気持ちを素直に表現することに、少しの理性も働かさない
きっと普段からこんな風だろう。思いやるとか、他人の気持ちとか、
そんな言葉は
知らないのかもしれない。俺が一番で、俺が真ん中で、すぐにイラッとする
パーソナルゾーンの狭い人間。流ヶ崎茜は、そんな男に意地悪してやりたい衝動にかられた。

「・・・ん〜。残念ながら、あなたの仕事運は今年いっぱいくらいで切れています。
今まで順調だった分、負けも大きいでしょう。あまり今から投資しないほうがいいです。
海外進出なんてもっての外、事業を縮小しなくては、潰れる可能性もあります。
会社の中も、あまりうまく回っていません。あちこちで歪が見えます。ほら、ここの盛り上がっている
所が・・・」
と　私がまだ話をしているのに・・
「はぁーーーっ。なんだとぉ。じゃ、俺はもうダメってことか？」

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4829s/

占いごっこ

2011年10月9日00時07分発行